

『ガラスの仮面』
の文学性

片岡あさ

はじめに

この本は2010年の8月からITmediaオルタナティブ・ブログで連載中の漫画『ガラスの仮面』の考察をパブーで電子書籍化したものです。もともとは速水真澄のスマートフォンの機種を考察していたのですが、段々と文学的な考察的に入って来ました

ITmediaオルタナティブ・ブログで漫画『ガラスの仮面』考察シリーズを開始して1年半が経ちました。「速水真澄のスマートフォンの機種は何か」検証したのが始まりでした。



当初の構想では3部作で終わるはず。しかし18作(番外編含む)書いたのに、構想の3/5までしか来ていません。著作権の問題を考えると、漫画の画像なしで説明する事が難しいと私見では感じています。しかも単なる漫画愛好家の私がITmediaエンタープライズに文学的な考察を書き続けるのは場にあいません。

そこで、ITmediaに掲載するには文学的すぎる内容をパブーで無料公開することにしました。これから書こうと予定していた構想の2/5の分量をかなり端折ってパブー版に続きを書くことにしました。今後はパブーに載せた無料版を論文に直して、学術データベースでも公開したいと考えています。

物語の核心に触れる部分(いわゆるネタバレ)を含んでいますので、それでも良いという方だけ読んでいただけましたら幸いです。恐れ入りますが、よろしくお願いいたします。

目次

01.

はじめに...1

目次...2

02.

同心円上に物語が進む...3

頬に触れることの意味...4

手を差し伸べる意味...5

速水真澄は光源氏に似ている?...6

トレンチコートという隠喩...7

03.

おわりに...8

編集履歴...9

奥付...10



ガラスの仮面では昔あったことと似たことが何回か繰り返されることは複数あります。
たとえば

1. 北島マヤの手が速水真澄の顔に振れる
2. 星を二人で観る
3. 速水真澄が北島マヤにコートをかける
4. 2人がばったり出会う
5. 速水真澄が北島マヤを守るために抱きしめる
6. 北島マヤが速水真澄を抱きしめる

等が思い浮かびます。

「2人で星を観る」に関しては「[漫画『ガラスの仮面』の物語完結のカギは速水真澄のIT化・前編](#)」で既に考察しました。夏目漱石『明暗』と同じように漫画『ガラスの仮面』は同心円上に物語が進んでいきます。そして同じような事を繰り返してゆっくり進んでいた物語がだんだん加速していき、最後は直線的に結末へと進んで行くのではないかと考察しました。

拙稿では「同心円状に話が進む」と書きましたが、私見では永井孝尚さんの『100円のコーラを1000円で売る方法 2』（中経出版）p,57 「依田誠のホワイトボード」に登場したPDCAのスパイラル（3次元）にた3次元の円錐のようなスパイラルで捉えるのが良いのではないかと考えています。同じようなシチュエーションを繰り返しながら、円の直径が徐々に短くなっていき、話の展開が早まっていくという考えです。

実際、2008年に別冊花とゆめで連載が再開されてから、単行本の発売ペースは上がっています。
41巻から42巻が出るまでに6年、42巻から43巻が出るまでに4年かかりました。しかし43巻以降発売のペースが上がりました。

41巻：1998/12

42巻：2004/12/16

43巻：2009/1

44巻：2009/8/26

45巻：2010/9/30

46巻：2010/10/29

47巻：2011/7/26

48巻：2012/2/25

49巻：2012/10/5

おおよそ半年から1年に1冊は発売されています。過去の未刊行原稿と重複するストーリーもあるためかもしれませんが、物語の進展が43巻以降はスピードアップしています。それにともなって過去に起きたエピソードと既視感がある出来事が発生します。しかし類似したことが怒ることによって、過去と現在では登場人物の状況や考え方が変わり、それにともなって行動も変わっていきます。

速水真澄と北島マヤは自分の感情に向き合い、相手に素直に感情を伝える。相手を思いやるという課題に取り組んでいる様が伺えます。

本来の自分と社会的な立場を演じている自分との葛藤に向き合いながら、北島マヤは阿古夜という仮面をかぶって速水真澄に愛の告白をし、速水真澄は大都芸能社長・速水真澄という仮面を外して北島マヤに想いを伝えています。



仮面をかぶることで本音を伝える。そして仮面を外すことで本音を伝えるという現象が起きています。『ガラスの仮面』という物語は演じるをテーマにした漫画であり、そして仮面・ペルソナを利用することで感情に向き合い本来の自分に向き合う漫画でもあります。演じることは別人の仮面をかぶることでありつつ、心を開放するという間逆な要素を内包しているようです。

単行本47巻は「奇跡の人」のヘレン・ケラー役で北島マヤが主演女優賞を受賞した時のダンスシーンや梅の里で星を見た時など、過去にあったことと類似したことが登場しました。シチュエーションは類似しているにもかかわらず、北島マヤの言動は変わっています。それによって北島マヤが少女から大人の女性に成長していたことを速水真澄は自覚させられます。

同心円上にゆっくり伏線を張りながら進んでいた物語は物語完結に向けて単行本47巻以降、急速に進展しつつあることが読み取れます。



「北島マヤの手が速水真澄の頬に振れる」の例としては

1. 単行本の33巻：劇中劇「忘れられた荒野」の初日の晩
↑北島マヤが台風でずぶ濡れになった速水真澄を思いやり、青いスカーフで彼の前髪のあたりを拭く場面
2. 単行本の36巻から37巻：山小屋
↑速水真澄が北島マヤに自分の本音（彼女への想い）を話している際、無意識に北島マヤの頬に手で触れようとした場面
3. 単行本47巻：アストリア号の甲板
↑速水真澄の依頼で北島マヤが劇中劇「紅天女」の阿古夜(舞台の主人公)の愛の告白を演じた際、マヤが背伸びをして速水真澄の頬に触れた場面

の3つが思い浮かびます。

忘れられた広野の初日打ち上げで北島マヤは、台風でずぶ濡れになった速水真澄の髪を青いスカーフで優しく撫でるように拭きます。速水真澄は一瞬青ざめて驚き、すぐ頬にほのかな照れ線が入ります。一瞬、少年のように目を見開き、感激した表情をします。自分を憎んでいるはず

なのに、台風でずぶ濡れになった自分を心配してくれた北島マヤの優しさに感激しているようです。

マヤの手を握って、「拭くのはもういいよ」と優しい顔をしてとめているのは注目したい点です。人前で、しかもポジティブな状況で彼女の手を速水真澄が握っているのは初めてかもしれません。桜小路優が様子を見て青ざめたのは速水真澄が少年のように目を見開いて戸惑い、恥じらっていたからではないでしょうか。

続いて速水真澄は、ジェーンが青いスカーフを握りしめて「スチュワート」と言うシーンは感動的だった、とスカーフを握りしめて語っています。舞台の場面で感動したのと共に、自分を思いやって濡れた髪を優しく拭いてくれたマヤへのありがたいの気持ちも感じ取れます。

共演者の桜小路優が割って入るので、それ以上の進展はありませんが、桜小路優が北島マヤの肩を優しくつかんで速水真澄から遠ざけようとするところに愛情と触れることの重要さを考えさせられます。

単行本34巻に登場した速水真澄の子ども時代から振り返って考えると、義父 速水英介に殴られている場面はありました。しかし実の父や母を早く亡くしたため、速水真澄が第三者に優しく顔や髪の毛に撫でられたこと、触れられた事はほとんどなかったような節があります。



他の人の髪の毛や頬に触れる行為は一般的には優しさや愛情表現に考えられます。北島マヤは単行本33巻の時点では速水真澄が紫のバラの人だと気がついていませんが、無意識に彼を意識していた事が手を差し伸べる行為から私見では感じられます。

梅の里の「山小屋」の時は速水真澄と北島マヤは二人きり。（梅の里にいる時に嵐になり、2人で山小屋に避難したため。）この時、速水真澄はマヤ以外の人間がいないので「社会的な立場」（大都芸能社長・速水真澄）としての振る舞いではなく、一個人としてマヤへの想いをもらす場面があります。

普段は社員や取引先、義父の目などを気にして「仕事のことしか考えていない冷酷な社長」を演じている速水真澄。人前では北島マヤに誤解をされて嫌われても言い訳をしません。「仕事のことしか考えていない冷酷な社長」のキャラクターにそって冷たい言葉でマヤに言葉を返します。

そんな彼が本音をもらす山小屋のシーンは、「大都芸能社長・速水真澄」という「仮面」から垣間見える素顔（本音）との対比がスリリングです。

手を差し伸べる意味

寒いからという理由で北島マヤに抱きしめて温めて欲しいと言われた時、彼は驚きつつも手を差し伸べます。マヤから抱きしめてほしいと言われたこと、温めるという大義名分により、彼は彼女に手を差し伸べます。そしてマヤも手を差し伸べ、手を握りしめて彼女の体を抱きしめます。お互いに手を差し伸べ、握ることで気持ちのつながりを表しているようです。



未刊行原稿では速水真澄を一真に見たてて、黒沼龍三の指示で北島マヤは阿古夜を演じます。その場に居るのは演出家の黒沼龍三と北島マヤ、そして一真に見立てられて練習を観ることになった速水真澄の3人です。マヤの愛の演技に速水真澄は心を引き込まれ思わず北島マヤの頬に手を差し伸べようとしてしました。

まさにマヤの頬に手が触れようとした瞬間、黒沼龍三は手を叩いて演技を止めました。速水真澄は正気に帰り、本心を隠して平常心を装った会話をし、場を去ります。黒沼龍三から速水真澄には婚約者がいる事などから彼を諦めるようにたしなめられ、北島マヤは泣き崩れます。

速水真澄は演技にひきこまれ、北島マヤが愛おしくて手を頬に触れようとしてしました。しかし黒沼龍三に止められてしまいました。忘れられた広野の時も桜小路優に割って入られます。本当は両思いなのに相手に触れようとしてもふれられません。触れることができないという行為から恋

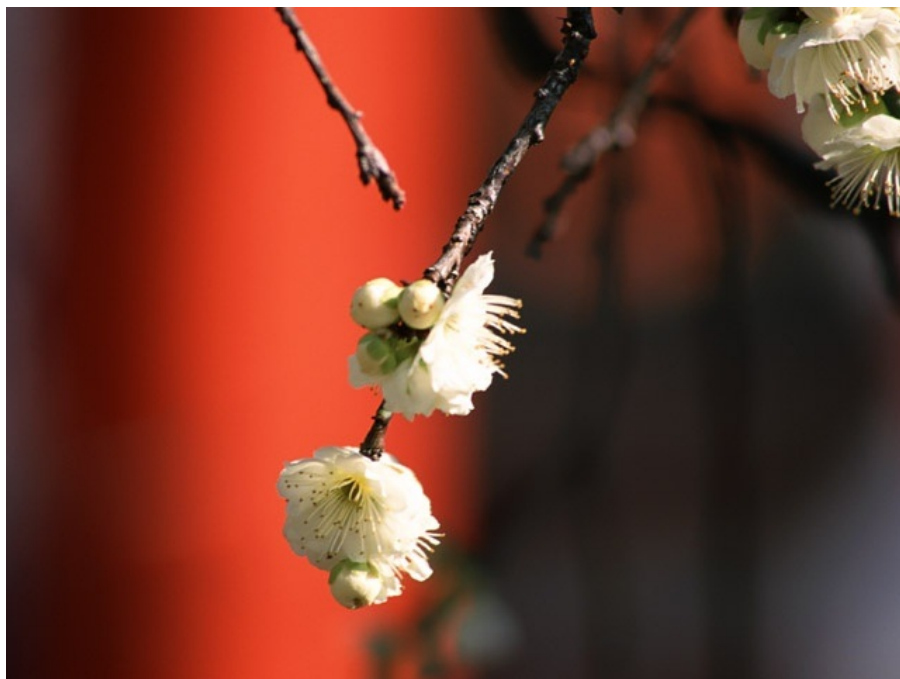
愛の悲劇的な行方を暗示しているように見えました。

しかし単行本47巻では甲板にいるのは北島マヤと速水真澄だけ。状況が大きく変わります。そして未刊行原稿では速水真澄が北島マヤの頬に触れようとしていたのが、単行本47巻では北島マヤから速水真澄の頬に手を差し伸べています。未刊行原稿では速水真澄からマヤの頬に触れようとしても邪魔が入り触れられません。



単行本47巻では「手を差し伸べる行為の主体」が北島マヤに変更されています。彼女から触れることは、速水真澄への好意・愛情を伝える事となります。彼は皮膚の感覚で愛されていることを感じます。理性による感情の抑圧は、身体感覚によって解放されます。

マヤから頬に触られることで、速水真澄は「愛されている自信」を得ることができます。したがって速水真澄の行動が変わるのです。



単行本36巻では梅の里でずぶ濡れになった北島マヤ。速水真澄は着ていたトレンチコートを脱いで彼女に着せます。山小屋では北島マヤは服がずぶ濡れだったので、速水真澄の提案で服をストーブで乾かしている間、トレンチコートを羽織って彼と退治しています。

本音をストレートに伝え会え切れなかったあと、朝、北島マヤは速水真澄にトレンチコートを返します。そのトレンチコートを着用した速水真澄は車の中でマヤの残り香に気が付きます。彼の感性はトレンチコートの残り香からマヤに抱きつかれた感覚を脳の中で再現します。彼女がいなくなった後、車の中で切なくて悶々とした想いをします。この場面は紫式部『源氏物語』の「空蝉」の場面に類似しているのではないのでしょうか。

空蝉の巻をかなり大雑把にはしよると、「主人公・光源氏は10代の時、未亡人の女君（空蝉）のところへ夜、偲んでいきました。しかし、部屋に残されていたのは空蝉のような着物だけだった」という内容です。光源氏は女君の生身の肉体がなかったことで、彼女の思慮深さや大人の女性の魅力を着物から感じていたように記憶しています。

ガラスの仮面の場合は当時、速水真澄が推定31歳前後。北島マヤが推定20歳前後。源氏物語とは男女の年齢差が逆です。しかし速水真澄が北島マヤにだけは初々しい青年のような表情を見せることを考えれば、空蝉の巻の青年・光源氏のように描かれているのかもしれない。この場面を読んだ際、速水真澄の「トレンチコート」に隠された意味があるのではないかと気になりました。※記憶違いかもしれないので、後ほど確認して修正します。

漫画「ガラスの仮面」の中では速水真澄と北島マヤが二人きりになったシーンで、速水真澄が着ていたトレンチコートまたはスーツを北島マヤにはらおせるシーンが複数あります。

- 単行本36巻～37巻の梅の里の場面、
- 単行本47巻のアストリア号

が印象的な場面でした。



物語の中では一年後に相当するアストリア号の甲板。この時も速水真澄は北島マヤにトレンチコートをかけます。海風で速水真澄は北島マヤが寒いのではないかと心配したためです。一年後と判断したのは、梅の里で二人きりになった間と同じ夏の大三角形などがアストリア号から見えていたからです。

ここで気になるのは速水真澄がなぜ都会の初夏なのにトレンチコートを持参して船に乗ったのかです。船の上は風が強いから、という理由を考えましたが、他の乗客の服装は長袖か七分袖。船上パーティが行われているのでフォーマルな服装をしている男性はいますが、速水真澄のようなトレンチコートを着ている人は見かけられませんでした。海は風が強く気温が低いのですが、そこまでは寒くないという設定ではないでしょうか。

トレンチコートという隠喩

速水真澄が「寒いだろうから」と心配して北島マヤにトレンチコートをかけたがるには理由があるのではないかと気になっていました。おそらくガラスの仮面の読者はその次の日の朝の「日の出の最中に北島マヤが阿古夜を演じる場面で効果的にトレンチコートを使うために作者は速水真澄がトレンチコートを持参するようにした」と答える方が多いのではないかと推測をしています。

それは演劇効果を考えた上で正しいことだろうと推測していますが、過去にも速水真澄が北島マヤにトレンチコートやスーツを頻繁に寒さよけという理由ではおらせているので、「北島マヤにトレンチコートをはおらせる」という恋は何かを隠喩しているのではないかと考えています。

というのは、梅の里で桜小路優が北島マヤに自分のジャンパーを寒いからとはおさせた際に、速水真澄は激しく嫉妬をしているからです。彼は北島マヤに上着をはおらせるという行為に大人の男性として女性を守るといった恋人のような感覚をいただいているのかもしれませんが。

単行本37巻の山小屋を出た後の車中シーンでは速水真澄がトレンチコートの残り香からマヤとの抱擁を思い出します。香り（嗅覚）から彼女が自分を抱きしめた時の感覚（触覚）を脳が再現。速水真澄は身も心も切ない気持ちになります。そして単行本47巻では北島マヤが阿古夜の演技の中で速水真澄のトレンチコートを愛おしそうに抱きしめました。

速水真澄は自分が北島マヤに抱きしめられたような気持ちがして、感情を理性で抑えることが難しくなります。単行本37巻ではコート＝北島マヤの肉体の隠喩（メタファー）となり、単行本47巻ではコート＝速水真澄の肉体の隠喩（メタファー）となっています。手を相手の頬に差し伸べる行為も同様。単行本37巻では速水真澄が北島マヤの頬に増えかけて手を引っ込めてしまい、単行本47巻では北島マヤが背伸びをして速水真澄の頬に触れます。



似たような事が起きていますが、行動の主体が入れ替わっています。そして同じ事が繰り返される中で2人の感情がだんだん変化している点が興味深いところです。一年前には夏目漱石「明暗」との類似を指摘しましたが、速水真澄が内心で愛しい北島マヤにコートをかけたがるのは、ある古典文学のモチーフと似ていると感じています。そのモチーフはガラスの仮面の中にも登場しています。



ITmediaオルタナティブ・ブログに連載していた『ガラスの仮面』のIT化論とは別に、文学的な部分について考察をしました。この電子書籍では、「手をさしのべる行為」「北島マヤと速水真澄の年齢差」「トレンチコート速水真澄が北島マヤにかけける行為」に注目して、考察をまとめました。

著作権の問題を考えて、引用はしないように心がけました。その代わりに文章だけではなく、イメージ画像を多くして、ガラスの仮面の世界観が伝わるように心がけました。文芸評論のたぐいとして書いたので、取っつきにくい点があるかもしれません。恐れ入ります。

『ガラスの仮面』は、古典文学に題材を取った劇中劇『紅天女』など、他にもたくさんの文学的な要素があります。『紅天女』は坂東玉三郎さんなど古典芸能の皆様によって新作能として上演されているようです。今後は、別な部分もKindleや書籍としてご紹介できればと考えています。

ここまでお読みいただき、ありがとうございました。

当書籍の更新履歴

2014年4月5日

1. 電子書籍の題名を「[速水真澄の紫のバラと源氏物語（無料版）](#)」から「『ガラスの仮面』の文学性」に改めました。
2. 画像を10枚程度追加しました。
3. 後半部分を非公開にしました。
4. 文章が長い部分に、句読点を追加しました。

『ガラスの仮面』の文学性

<http://p.booklog.jp/book/68173>

2013年3月23日 初版

2014年4月5日 第二版

著者：片岡あさ

著者プロフィール：

<http://p.booklog.jp/users/kataoka-asami/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/68173>

ブックログ本棚へ入れる

<http://booklog.jp/item/3/68173>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのパー（<http://p.booklog.jp/>）

運営会社：株式会社ブックログ